（遞信省認可）

掲載要目

一女生の無名小説

懸賞文藻

春衣裁縫

以良都女

第七十八號

定價一册金五錢

明治二十四年二月五日發兌

新流行

米のあげものの●韵文と端唄口調●三坂孃の言文論●種々の新奇有益な通信問答

いらつめ第七十八號目次（明治廿四年二月五日）

無名小說…………神田一女生
春衣裁縫（懸賞文藝）
日本音樂史稿（六）…………準　縄　子
舊幕時代の奥女中（一）…………天保老女
花浮水（和歌）…………三坂きぬ子
江上冬月（和歌）…………同　上
四季の夜每（今様四曲）…………菊野花子
新流行
　堆朱の櫛＝婦人結髮のタボ＝ピンの禁止
　頭痛の療治について
　婦人の愛らしさ…………りう子
斷簡
米の揚物（以太利料理）
家事雜則…………一老婦
文學小言
　韻文と端唄口調＝好色の文字＝文の上下
寄書
　再び樹澤の君へ（三坂きぬ子）＝新年初刊のいらつめ（ま
　～子）。
通信問答
　文學美術流行化粧家事社交について種々のかきはつめ
別製さしゑ（石版寫生極彩色コルム畫）瓶花二種の圖

定價詳細

前号に委しく有り升

從第七十八號至第八十二號五部版權所有

明治廿四年二月四日印刷
明治廿四年二月五日出版

發行人 東京市神田區平永町九番地居住 山田武太郎
印刷人 東京市本郷區駒込西片町十番地居住 山本盛之進
發行所 東京市神田區神田平永町九番地 成美社

○懸賞文藝新題

○第卅六回題（何でもよし）
　右 人に半襟を送る…………一月十日〆切
○第卅七回題（唱歌文章に限る）
　右 無言の愛情…………一月廿日〆切
○第卅八回題（何でもよし）
　右 嬉しいもの何でも三つ…………二月十日〆切
○第卅九回題（唱歌文章に限る）
　右 汐干狩…………二月廿日〆切
○第四十回題（何でもよし）
　右 櫻陰天女圖…………三月十日〆切

賞品は菊水摸様の金又は銀杯

右賞品は一等賞の者、二等三度れ者、三等六度の者、四等十八度の者及び是と同じ資格に相當する者に限り進呈しまそ。
○賞が重なつて數に充る人は其賞を受け度題を詳細にしるして賞品を御請求なさい。

いらつめ第七十八號（明治二十四年一月廿四日）

無名小説

神田一女生

第一回

ばた〳〵がらりと障子のあく音、

弟「姉さん只今。　お父さんやお母さんも？」

といひながら火鉢のそばにかけよる活潑さうな十三四の男の子、身にはセル地の洋服をきりゝと着て、學校用のカバンを左の肩にかけたり。　姉とよばれた少女も机に向ッて何か一心に認めて居る樣子。　筆を持ッたまゝ鳥渡ふりむいて、

姉「まア大きな聲だね。　驚りしたよ。　次の間に春ちやんが寐てゐるから靜におしよ。　あけッぱなしはごめん、しめておくれで……さう〳〵……お父さんやお母さんかい？　今晩は他處にお客に入らしッたのだよ。」

僅にこたへていそぎの物か又も筆先に墨を染めて書きはじむるを妨にかゝるやうに詞を續いた弟、

弟「さう……あのね僕は口惜しくッて堪らないんだもの。」

火箸を取ッて灰を無暗につきながらいふ。　姉は相手に成ッて、

姉「おほゝ、何がそんなに口惜しいのかい？　また何か金井（朋友の名）さんに負けたのかい？」

弟もうウンと顔を振ッて、

弟「そんなまとぢや無いんだ。　今日ねあのいつもの意地惡と書物のことで喧嘩したら、僕の事をやア車屋の子だから馬鹿だの何だのッていふから……」

少しうるみ聲になッて、

弟「車屋の子だッていふから……失敬な奴だ、僕は月山秀樹は長男秀吉だッて威張ッてやッたら……やア〳〵云ッて、知らないで居らア馬鹿秀々々々といふから僕は口惜しくッて泣いて居たら先生がきて、皆なを叱かッてくれたからよかッたけれど……僕も車屋の子ぢやアありやしないねエ……ね、姉さん。」

先刻から聞くやうな聞かないやうに書きものしてゐた姉此の咄の半ばで何か心に感じたものと見え、筆を置いて弟の顔を見つめて居りしが、幼年にも心配さうに尋るこゝろ、殊にさうであるかとでもいへばともかく、さうであるまいとふりきめて是ほどおもひこんでゐるもの誠を告げたらどの位力を落して……そこは心が卑屈になッては先々のためにならぬ、もうすこし考へのつくやうになッてからとッくりいひきかせても遲くは無しかし……かういふことも度重なッたら……取り分け怜悧な性質だから大概察しるかも知れぬ、誰かいひ出したものか、困ッたことが耳に入ッたものと思案に暮れて、急には返事も出ず、炭取引き寄せて消えかゝッた火にさし加へながら答へもないのを弟はもどかしがり、

弟「えエ姉さんどうしたの。　今のお父さんやお母さんも僕のほんたうの親ぢやないのかい？」

今はせつぱつまッた處、何とかこたへねばならぬ、

姉「何といふのだねヱお前のお父さんやお母さんも今に御兩親より外になりやしないよ。」

弟「さうかい。　ぢやお父さんはもと車引きだッたかい？」

姉「おほゝ、とんでもないそんなこと云ふものぢやないよ。」

弟「だッて……そんなら皆ながあんな事いふのだらう。」

姉「そりや喧嘩したからおまへをいやがらせようとつまらないことをいッたのだらうよ……明日から誰が何ていッたッてかまはずよおいで……またまた妙な顏してよ。　その人が何て云ッたッて内の姉さんがさうでないと言たら是ほどたしかな事はないぢやないか。　よその人がうちのこと知るもんかねヱ。是はお前に言ッて聞かせるのだがね、よしお前が車引の子だッたからといッてちッとも恥かしいことはないよ。　勉強して、立派な人にさへなれば大臣だッて何にだッてなれるくらゐそれが一番えらいのさ……大臣の子だッて遊んで、なまけてばかりゐたら車夫になるかもしれないからね、何でも幼少な時からよく親のいふことをきいて、勉強しなきやいけないよ。わかッたかい？」

弟「さうだねヱ勉強してえらくなれば何にでもなれるねヱ。僕も大きくなッて軍人になるのだよ。」

姉「さうかい？　どうしてお前は軍人がいゝのかい？」

弟「だッて軍人もぴかぴかしる立派な着物をきてサーベル差していゝもの。」

姉「それぢや只あんなぴかぴかした着物が着たくッて、軍人になるの？　もしあんな着物きないやうになッたらどうするかい？」

やうやう年は十四、何をいふのか只あの立派な服、えらさうなところに目がついて、自分も成人になッたらあんな着物きたいとおもふこゝろ。　ふいと口に出して言ッたをかしさ、それを問ひたゞす姉、もし着ないやうになッたらとの質問、かねて學校では軍人も國のため身を捨てゝ、忠と盡すものぞとをしへは受けてゐながらかう問ひたゞされて見るとぐッとつまッて、しやうことなしにひねくッてゐた鉛筆小刀出して、火鉢の中へけづり込めば姉もふッとり笑ッて、

姉「軍人といふものは命を捨てゝ國の爲に盡す職分だといふことは學校でをそはッたらう。　こんなことが直ぐ返事が出來ないやうぢや仕方がないよ……だから軍人といふものは一番名譽なんだよ。　只着物が着たくッて、軍人になるのぢや、若し服制でもかはッた日にはもう軍人はいやだといふのだね……さうぢやないか……なんでもい正成のやうなえらい人になるんだッて……おほゝゝまアまア先きは何にならうと今のうちは普通のこと……學校で先生のをしへることをよオく覺えて勉強しなきやいけないよ………もうそんなにけづらないでもいゝぢやないか……火の中が臭いからおよしよ。」

暫くは無言、やゝあッて弟は硝子ごしに庭の方と見て、

弟「やア降ッてきてうれしいな、澤山積ればいゝ。　明日野澤君と雪ぶつけする」。

いひながら起て障子のそばに行き、硝子と顔とびッたりつけて、

弟「姉さんごらんよう、雪の降ッて來るらベル（犬の名）の喜んでころがりまはッて居るよ。」

といふかとおもふと今度は硝子に息をふきかけて、何か書き書いては消し、又息を吹きかけるなどそのあどけなさ。先に車夫の子といはれて、口惜しがりしことも忘れしものゝ如し。

やがて火ともし頃となれば雪さへ降りそふ寒さの故にや何方も早く雨戸をくる音して、下女はランプを持ち運び、

下「おや坊様あゝお入らッしやいましたの今日はお珍らしくおいたもお出遊ばさないとおもッて居ましたら‥‥あのお孃様もう御飯の仕度も出來て居りますから何時でもよろしう御座いませ。」

姉「あゝさうかい。　それぢや直出しておくれ。」

下「かしこまりました‥‥今のうちこちらのお雨戸を〆めてしまひましやう。　まア〳〵大層降ッてまゐりましたねえ。」

姉「さうだね春ちやんもどうしてゐい？　今日はちッとも啼き聲が聞えないがさッきからまだおきないのだらうか。」

下「いゝえ今しがたお目がさめて、婆アやさんがれんぶして、あちらに居ります‥‥‥今晩は皆様がお留守でお淋しう御座いますから。」

と下女は雨戸も〆め終ッて彼方へ行く。

弟「姉さん靜岡の婆アやはどうしてゐるだらうねエ‥‥今度姉さんが手紙遣るとき僕も遣るよ。」

姉「この人はおもひ出したやうに何をいふのだらう‥‥手紙かい。　あゝおやりともきッと喜ぶよ‥‥さア御飯が出たらうから行きましやう。」

弟「姉さん今夜算術教へてをくれよ。　もう試驗がちかいから‥‥それに今度優等だッたら約束の靴足袋‥‥」

姉「あゝきッとこしらへて上るから勉強おしよ。」

第二回

此二人は姉弟は靜子秀吉とて十七と十四、猶この次に春雄と呼べる二つになる弟あり。　父を月山秀樹と呼ばれ三重縣士族、當時或省に奉職して、奏任二等の卑しからぬ地位を占め、長官のおもひ淺からず、持ち傳への財産も少なからねば豐に其日を送り、今年四十の坂を五つ六つ越した分別盛り。妻のよし子も四十近い年恰好、夫婦共に打見た處から好人物といへばちッとお人よしの方にきこゆれどさうでなく、意地もあり、氣性もある夫婦なり。　二人の姉弟といつくしむ事一方ならず、身にも代へがたき寶同樣、誰とて實の子と思はぬ者なけれど、内幕をさぐれば怪しう結んだ親子姉弟の縁、

只末の二歳になる幼子ばかりがまこと夫婦の中の實子、是と知てゐるは出入のものゝうちで長年しくじりもせぬ、無事に出入をしてゐる髪結ひばかり。　抑姉靜子の生の母といふはみよ次といつた新橋の藝者。その器量と心立てを思ひとかけ財産のあるにまかせ、親々にも極内で遂に根引して、麹町邊にしやれた家持たせ、圍ひ者としたのがこの秀樹、その睦しさ。　程なく懷妊して生みおとしたのがこの靜子。　秀樹の初子持つたうれしさ、ゆく／＼は此みよ次親のゆるしをうけて、正妻にとおもふ下心。　處へはる／＼上京した國元の兩親、よい折からと實はかく／＼しか／＼の譯で是まで世話しるみよ次この度子まで生んだこと故改めて正妻におゆるし被下とおもひ入ての頼みなれど、昔氣質と貪欲をかねあはした兩親目をつり上げての立腹。　道理こそこの頃もいつもにない金の請求、不思議なことゝ心にかゝりて、見物といふにつけたり手まへに様子見たいばかり。　來て見ればこの始末は親に隱して不祥千萬。うち見けして渡して置た公債證書大かた身受けよつかひなくしたことでもあらう……何しろそんな者置ては嫁を貰ふ邪魔になる、　子ぐるみ縁を切つてしまへとつねに似合はぬ邪慳、初孫可愛いくともおもはれぬか。　一時賤しいつと先した者とて心だてさへよく／＼ば……子ぐるみ縁を切れとは情ないこゝろ、又折を見合はしてと日を送るうち、その頃秀樹はまだ判任官、その長官といふのは同縣人秀樹の兩親とも知る中。　ある日悴の世話になる禮旁々久し振りでと上等の菓子折一つはずんで年寄夫婦がその長官のもと音信れると、何日上京した、遠方の處よく尋ねてくれた、國元は別にかはりもないかと夫人ともど／＼如才なくもてなし、段々悴がお引立を蒙り、お禮の口上やうもと夫婦額を疊にすりつけて、平蜘蛛のやうになれば、何の一向世話といふ世話もせんが元來才氣のある男ぢやから事務がよくさばけて、老年の者も舌をまく程ぢや。　おッつゝ立派に出世するぢやらう。　末を樂にしてゐるがいゝ。　何かな今度は見物に上京したのか。　いゝえおもてむきはさうで御座りますと實は悴も三十近い年、良い嫁貰つて安心したい願ゆゑ、どうぞお心當りが御座りましたら何分お世話をと頭を下ぐる夫婦。　それは何より好都合、實は先頃から書面でなりと御相談しやうかと思つてゐた處、外でもない私の二番娘嫁に貰つてはくれまいか……秀樹は若いに似合はぬ堅い男ではあるがあまり單身で置くとよい考へも出まいからな……いよ／＼私の娘嫁にすることゝなれば二千圓は持參金をつけるがとの長官の詞、何がさて長官のお孃様、それに二千圓の持參金、鐘太鼓で捜してもあんなうまい咄しあるべき筈なし。　何かれとくがありさうなと氣もついたれど何しろ二千圓といふ金に目がくれ、うらいふうまいこと逃してはならず、悴とて否やのあらう筈なし。

右無名小説は前記の通りの署名と以て投寄された物です。中々筆も熟し〻上作もゑ終に此号からこゝへ載せる事と爲りましる。尤も完尾の上取り纏める事の便を料り、わざと勝手なところで一号宛切ッて載せました……いらつめ記者

第三十五回懸賞文藝應募得點

題　春衣裁縫

○俳句

夜をひるにつぎても縫ふや春の衣　　耕雲（サカヒ）

右第四等賞

○和歌

足乳根のなかき恵みは幼子の
いともたかなる袂にぞ知る……茵園居士（フクシマ）

うらおもてぬふ手にあまる心をば
綿をつゝみてたれにきすらむ……露城（イセ）

評　「をぞ」がやゝ面白くないでも。

けさ見れば霞たな引くいざゝらば
われもたゝまし春のそれ衣を……横山ひろ（ヒウガ）

年はまだ冬にしあれど（あらたまふねせ）はるはきぬ
縫ひこし（たちぬふ）今日は春心地する（冬ともなし）　耕雲（サカヒ）

以上四首第四等賞

やがて引く霞のすそやいかならん
けふたちそめし花のいろぎぬ……小富士（イヨ）

賤の女が春のまうけにぬふ衣は
夜寒にうちしころもあるらん……仝上

新玉の年のはじめのうれしさと
けふたつきぬの袖をつゝまむ……横山ひろ（ヒウガ）

評　巧言

長閑なる春と愛でつゝ我袖と
霞のいろに染てこそぬへ……本吉みは（ヒウガ）

梅や見ん櫻やとらん花染の
衣たつべき時は來にけり……仝上

冬は日もみじかきものと春の日の
長き衣をたちにけるかな……仝上

春の日にきるべき衣たちそめて
冬しも花のなつかしきかな……仝上

けふたちし袖をつらねて誰ともに
たのしき春の花や尋ねん……仝上

暮れいそぐ月日わすれて新玉の
年ことほげるころもたつなり……仝上

けふたてる衣の袖に春の日の
長きすがたもこめてこそ見れ……仝上

けふぬひしひとへの上に春されむ

霞のころも幾重きはらん……………仝　上

花ひらけ鶯きなけ春ころも
ぬふてまつ日も久しかりけり……………仝　上

春來れはいさやきましとたつ衣
ぬふてくらす日は今年なりけり……………仝　上

ぬひかへす袖もうらゝぬ君か代の
春よ逢ふこそ嬉しかりけれ……………仝　上

治まれる御代あとはきそ我袖よ
嬉しき春もぬひやとゝめん……………仝　上

春衣いさやぬはなん青柳の
糸のみだれてよしとけずとも……………仝　上

青柳の糸のみたれも見えぬまに
きが春ころもぬふべかりけり……………仝　上

ぬひなせる衣の袖はせまけれど
心もたけき君が代の春……………仝　上

草木さへ春はきどりによそへると
あぞ我衣たゝでやむべき……………仝　上

ひとへある衣の袖を八重霞
あびたるけふぞぬひ初めなける……………仝　上

つゞりさせてふ虫の音もやみにけり
いざやたゝなん春の衣を……………仝　上

長閑なる春の日にきんと衣たちて

冬のさむさもわすらへよけり……………仝　上

春衣ぬぬてきる日の嬉しさは
袖にこぼるゝ心地こそすれ……………仝　上

右第三等賞(但本吉氏のは全体で三等賞)

○唱歌

(イ)　相木虎之助(イヘシロ)

學びのまどの乙女子が　指とりまてる初春の
雛さまごとを楽しさに　紅き紫きあやにしき
種々のきれとりいでゝ、　裁ちぬふさまのあどけなさ。

右無賞

(ロ)　相木虎之助(イヘシロ)

凍はるぞうりの夜半過るまで辛しともせず我愛子と。
懐にして洋燈の下よ　裁ち縫ふ春衣年立ちかへる
それ朝には父母まちまそ　床しの故郷見る嬉しさ。

(ハ)　蘆野潤三郎(イヘシロ)

學びの道れ道草と　友のいさめし針仕事　若しそ
のまゝにおこたりて　拙かりせそこの春衣　たちぬ
ふすべやなかりけん(ミナケヅル)。　針目眞直に通れる
も　折目正しく疊めるも　妾が曲らぬ心なり。
綿こそ入らね縫ひこめし　妾が熱(厚)き愛情(まごゝ
ろ)は　君がはだへと暖めん。　君がそだへを暖めん

以上二曲第四等賞

針（二）

針の足暫しやすみて子の寐顔　まもれる母の眼は涙。　蘆野潤三郎（イロハ）
拾ひ集めし紙屑の　めぐみは薄き（も厚き）二子縞
おのが春衣と悦びて、　物もねだらずこの熟眠　をさ
なごゝろのいぢらしさ（あどけなさ）。
明日はまた　仕上げを見せば
いかに寐覺の能かるらん。　いざ急がま
し針の運びを。
右第三等賞

○端歌

新（イ）

新玉の春のはれ衣を君がため　夜ふけて縫ふもいとは　村田かなへ（ロカ）
ねど　今宵訪ふとのふますさは　ありや嘘かや誠か
や。　嵐に響くは鐘ばかり　數ふる胸に湧く涙
針目の干ぬまもないわいな。

評　はうたの口調を取るだけあらまだいゝです。　いやしい意匠を取るのもよく無いです（後段文學小言欄參考）

文章

母（イ）　鋼虫春雄（トマニ）

「母ちゃん、いゝ着物！　だれの？　僕の？」
奪ふ様に手を取ッて、頭の上からすッかぽと被り、
「なゝ小ちやい。　僕に小ちやい！　母ちゃんもッと大きいのと僕にしておくえよ、よ！」
「こゝ危險！　針がさしてあるからついちやア痛いよ。こちらへおかし。」
「大きいしてくえんにや破ッちやらう。」
「大きくしてあげやう。　こちらへおより。」
小兒は手を取り、引きよせて、頭にかぶれる所を肩に下しますれ（せ）ば、裾を引きせるばかりに長くなりました。
「あゝ長い！　長いのもいやじや！」
右左お体を振れば脊筋に打ッてあッた針、小兒の脊を突きました。
「痛い〳〵〳〵！　母ちゃん痛い！」
「何處〳〵？　何處が痛いの？　おねぎ〳〵！」
小兒は無茶苦茶に破れるとも顧はせぬぎすてました。　母は丁寧に皺を伸しながら、
「お啼きでない。　此着物はお正月に着るのですよ。　まだ痛いか？」
「うゝん痛いことない。　そんな着物僕はいやぢや。」
「なぜ？」
「長いのらいやぢや。」
「まア一寸御待ち！　ちやんと坊の身に合ふ様にしてあげる。　坊のやうに未だ出來上ッてないのを無理におきやッたから長かッたのやそね。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「うまいことあるのい？」
「わ〻なるとも〳〵。　坊がお正月に着る時は何とも言へぬよい着物になッてゐるぞへ。」
「そんならうれちい。」

朝（ロ）

右無賞　藤元なさ（十七）

「朝ちやん。　さう朝早うから精出して縫はなくてもい〻ぢや無いか」
「でもお父さん。　もうお正月まで僅か三日しか有りませんよ。　そしてあなたのお衣服もちやんと縫へましたよ。それ御覽！」
「それは如何も御苦勞だッたはね。　おや中々針目も奇麗だ。　此位上手になッてもう隣りのおはあさんよも負けはせぬよ。」
「あの若菜摘みにね、あなたも其お衣服着なすッて、妾も此衣服着まして、お行厨こしらへて、緩くりと行きましやうよ。」
「さうだね。　お前は中々仕事と仕てくれるから是非一度も面白い遊びもせねばならぬ……しかし朝ちやん、障子をお明けよ。」
明け放つ障子一ぱいにさし込む朝日影、今日はいつに無い温暖に照りそめて、風は春つげ顔に庭と吹き、見れば小隅に

彳亍む老梅も一點二點早や紅の蕾を破り、清香ハ微かに座に入ッて、吾が春衣を匂はし一氣の故か一吾が春衣の花に宿る胡蝶は三つ四つ二つ雙々飛び交る心地せり。

暮れ行く年（ハ）

小富士（十二）

暮れ行く年の營に取かさねて來る春のまうけ何くれと忙がしき中に愛女の春衣の支度これよからん、否あれよそ紋付は何色にかすべき、流行とねぞみあれ、帶地は繻珍、色は白茶よ勝るものならじ。　此の色にも彼の色にもよくうつれたと評議とり〳〵、其度毎に呉服屋の雇人足をそらにして、打ちつぶやくもをかし。　やゝ一決して夫々に調ひし後裁縫室またにぎはし。
「おや〳〵出來たね……まアこのつまのよく出來てゐる事ねェ。　縫女此紋付には彼方の帶がよいね。　此れは今縫てゐるのがよくうつりさうだね。」
「さやうで御座いますあ。　あの今年も御洋服で入らッしやいましたが來年の開校式にも……」
「和服で行くと言ッてたよ。　洋服もよいが和服もをとなしくてい〻ね。」
「私しなどはどういたしても和服の方がひいきで御座いますよ。　お美しいお孃樣がお髮と文金に遊ばして、此お召しに此おみ帶をおしめ遊ばしたらまアどんなにかお美しくゐら

ッしやいましやう。　私の歳さました帯をしめて、御花見の御供にも是非は〻。」

浮世の秋もしらま弓此處のみ春の長閑さよ。

竹下山人(レフマ)

(二)

西洋綴ぢの「裁縫物雛形」とか表題ある小冊子を彼方此方と眞面目に半時ばかり点撿し、稍滿足する處があッたと見えて、取り并べたる數多の織物の中から三四尺ほどの切れを撰り出し、二裁ち三裁ち裁ッて、又もとの座にかへり、物指をいぢりながら頻りに考へて居るのがまあと此家の新らしい奥さまでした。　此折り次の唐紙をいきなり開けて、

「あの御孃さ……ではない……あの奥さま……」

不意に云ひかけられて物指を取り落し、

「あらいやな乳母やだしぬけに……」

問ひかけたのは即ち乳母ですが普通とはやゝ關係が變ッてゐるやうです。　乳母も充分な笑を含んで、

「又赤さまのですか？」

「又なんで乳母やは笑ふのかえ……」

「いゝえお手廻しがお早いといふことですわ。　おやそして春衣でもね御孃樣なら又奥樣でした。　おはゝゝ」

「おはゝゝおしやべりなもアやだこと……だがねこれも内々だよ、當もないのだもの。　いゝかえ。」

「ようございますともたしかです。はゝゝ」

「奥さまもう披露してもよう御座いましやうねエ。」

産室の側でうれしさうにいふのは慥かに乳母の聲でした。

仝　上

(ホ)

「藤川さん御免下さい。　おやお熱心にお針で御座いますね？」

六疊ばかりの離座敷の障子を開けてしとやかに内に入りましたは主人とおなじ女學校の生徒でした。　そして藤川春江といふは主人の名前だとのことです。

「種子田さんですか。　入らッしやい。　貴孃學校から唯今？」

少し早言葉でしかも笑ひを含んで居ります。　此時種子田孃は頭を一寸まげて主人の問に答へました。　そも〳〵親密の代表と見えます。

「あなた大層お美しい春衣ですね。　何方の御召しで御座います？」

この問に藤川孃は頗る當惑の樣子で返答もよほど澁りました。

「春衣で……これですか……あなた當て〳〵ごらんなさい…………三回で……」

急に三回といふ制限のついたのは稍直打ありさうです。

「ではあてますよ。　横道でもようござんすか……あの

操さんの御歸朝と來月ですねへ？」
十分可笑んといふ口調です。
「わなたろんな問がありますの……」
少し顔色が變ッて來ました。多分脈搏もましたのでしやう。
種子田孃とそッと藤川孃の顔をのぞき、
「ようござんます。もう分りました。はゝゝ」
「わら冤罪を……」
藤川孃の心を化學上で分解したら如何でしやう？

（へ）

花翠（トウケイ）

「春や……白木屋はまだ來なんね？何として居るのだらう。」
「もう參ります時刻ですが、矢張りいそがしいと見えまして。」
話しかけたるは未だ年二十に滿たぬ令孃、話しかけられたるは乳母らしい人物、
「門口まで出て見ておいでよ……否もう一度迎へに行ッて來てもらはう。」
「だッて孃樣、今朝から三度參りましたよ。さう度々行くと店の者に笑はれますよ。」
「それでも間に合てないと……どうか心配になッて、」
令孃の父公――此家の主人は今年の夏頃公務を帶びて、奈良地方へ出張し居り、昨日漸く歸京した許り、乃ち大晦日の四日前よ……
是より二十日許り前の事、令孃は新春の衣裳頭飾り等の氣に掛ッて、夜も碌々眠られず、母公へ如何せんと相談せしが、父公が歸京迄待てとの命令、飛び出しさうな胸を抑へて、據ろなく父公の歸京と今日か明日かと待詫びしに、伸び延びて、漸く二十八日の晝頃お歸宅――父公が來る座るか座らないに新春の仕度と如何が、最早百時間と猶豫はおざりませんと堰立てる。父公も最愛の一人孃のこと、そなたの好みに任すとの一言、それ故早速出入の白木屋を呼付る所で。が白木屋も暮の事、急にはやッて來ず、令孃は心配で堪らず、使を三度迄も送ッて、其上乳母には門口へ立て見てゐろとの注文、が白木屋も程なく出頭したと見えて、
「それでは白木屋さん、此れを定めましやう。そして成るたけ早く、仕立も丁寧に……」
「かしこまりました。外樣なれど御斷り申し上げますので、實に仕立出方も一ばんで、大いそぎで仕立まして、左樣大晦日の夜二時頃迄には間違なく差出します。」
令孃はほッと一息、若し父樣がもう一日晩かッたらば……
然しまづこれで一安心！

以上五章第四等賞

（ト）

いそと女（トウケイ）

今は躾も殘りなし、やう〳〵にてこそ出來上ッたれ。斯

くて見れば七子ー七子に裾模様も中々に恰好善し。此頃こなまり見掛けざりしまゝ何とあう古めかしとのみ思ひつるよ今またこれが流行ぞといはるれば裾模様のいとつき〴〵しう思はるゝこそをかしけれ。況んてあの脊高のお孃様これ召しまさば、嗚……嗚……なゝ言葉ハなし。

あゝ吾身も昔ば、誰れ劣らぬ昔もありけり。それよそれ双手になまる年の始め、別當が掛け聲、馬の蹄音勇しく、双親様に伴それて、春田の家に行きし時、思へど胸も亂るゝ。今ハ大川伯の邸とはなり居れど――其頃の結構は中々に此内とても優りはせじ。父上方ど維新の頃よりの御馴染、殊に其頃ハ御同役れ御中とて、日一日もてあしの限り、たのしきれ數々。やがて日晩れぬる後、奥座敷にて吉雄様と吾身とを並べて、親様方の何やらのお話し、お喜びの聲々。譯解からねば嫌がる二人に酒なめさせて、聲高々と父上のお謠ひ、幼心にも兼ねてのお好きとて怪しうも思はで打過ぎにし後は兩家の徃き來一入繁く、われは一入伯母上になづきたり。

吾十五の暮、來る春こ父上れ歐洲より歸りますとて、母上の、吾身のも、父上のまで彼や是やと春衣の出來、忙しく指折り數ふる央、一通の電報耳を破りてあこれ一家を滅却しぬ。日頃堪へぬ御氣質、殊に荷にも我神州を侮辱せんずる碧眼奴、彼が鈍刀叩き落し、揮り翳したる日本刀！　刄の光り閃一閃、見ッ事眞二つに斬り捨て給ひしは意地づくの決闘の上れ事あるを、卑怯にも御歸りを待ちうけてピストル取ッて闇撃とハ今思ふてもちッ！口惜し。日頃御病身の母上はこれよりの御重症、枕頭に吾身一人を置いて御遺言の數々。涙の中よ發失！始めて聞いて、今迄不審がりし事共のさてこそと思ふ節もあり。今は唯耳熱く、涙止らざ。

新墓の前白露しげく、泣く〳〵歸れパつひ此頃迄は御歸國の噂のえにてひたどよめきにどよめきし我家、今は唯寂寞として鳴咽れ聲れみぞ聞ゆめる。春田の家も不幸打續ヿて、吾が爲めよは上もなん便れ御方様も便ない孤兒となり果てゝ先つ頃より身寄をおふて、西の國よぞ在すなる。

(十)

水野秀(オホナカ)

「阿母さんそを廢して、僕のを縫てお呉れあア。阿母さん……。」

「縫ておげるよ間に合ふやうよ……學校に（へ）行て勉强なさん。」

「阿母さん乾度縫て頂戴あア。」

「乾度！　乾度！　禮服着せてお禮に出しますよ。」

「洋服着て御目出度うといふの！　僕はお正月が見えるやうだ！　お母さんは？」

苦しき質問！　何と答ふべき？　一年三百六十五日些細の手仕事ゐ針より細き煙を立て、艶なヿ緒田卷を繰りかへしてれ活計、明け暮れ手よとる綾綿、眼眩き程の品々と裁ち縫

ひするも人にとて。吾身に添はぬ仕立かな。過ぎつる頃より手にとるものは春衣—ことに人に見よかしとの晴衣、あれを着るもの着するもの、如何にうれしくありつらん！　世は風潮に誘はれて、魅惜れる稚兒も無理ならぬ。智識發達すればなぞ美妙の端と知ればこそ好奇心も形はるれ。心のまゝの注文は末頼母しく樂しけれ。さてさりながら賤の世帶に搦まれて、廻りかねたる糸車、片輪車により絶り、學は道に辿る兒も最愛しきまとの果あればとて錦に花を思へばとて不幸の淵に沈みても八度の春を壽ぶれて、晴衣を着する術さへなら親甲斐なしと譏られんから恥かしと沈思默思を打ち破り、應揚に入り來り、

「南區役所より………」

一封を投じて去る。後見送りて封押し切れば、

「御用候條明廿三日午前第十時………はてな禮服着用とは？」

「七年一日の如く貞節を守り、兒子の養育を怠らざる段奇特に思召れ、府公より目錄の通り下賜相成りしは誠に名譽のこと、當區內に於て貞節を旗賞せられしも本官も甚だ面目に存ずる……此后も一層勉勵して、御賞與の趣旨に適ふやうに希望いたす………」

＊　＊　＊　＊

「阿母さん立派ですなア。それ着て、新年式に行くの？　どうも僕は愉快だ！」

「れ、お氣に入りましたか？」

「僕はどうも　！」

「それで母も安心した……もう本を仕舞ッて、お休み……」

「阿母さんは？」

「これを縫てから……」

「左樣ならば御先きに御免……」

針は運びもかるく〳〵と縫ひ上しげて二点鐘！　嗚呼草葉の君も見そなはせ傍の熟睡の面影を！　君に操の立田川、錦の衣に肩廣々と誇るは妾は樂にあるめり。　枯木に花の思ひにぞあるめる。　春衣！　春衣！　遲かれかしの春も早く來よかしと思ふはそも何故？

（り）　　香園女史（イカ）

朝夕の風に木の葉を拂はれて、怨めしさうに衝ッ立ッた冬木立、秋ばかり物の憐れと知るものと思ふのはそも〳〵誤謬の至りです。が、何となく歳の暮れは自から揚氣がついて來ます（來るもの。）軒端—枯松葉の散りかゝッたふるき（ふるい）軒端に囀づる寒子鳥、氣の所爲か知らむ其聲の如何にも愉快げに（らしさ）。耳と撫でゝ（ケヅル）「千代」といふは知ッて鳴いたにや（のか）。誰に何時聞いて、春が來ると覺えたか早やいかめしいその（ケヅル）枝には梅に花を呼ぶ（の滿開といふ）時期も今暫らく、時には先を越して、紛々とあれあの香は？

も有りました)。 さて〳〵〆飾ふ勇み立つ世の中。 南の窓に笑聲(の)高く(い)、何かと問へば今ッかとかるたの大騷ぎ! まこと春は待遠しさには鳥も花も人も同じことです。

特に年頃の少女達はそれ〳〵看初の春衣を作るとて、親友の家へ集ッては互に吾先きにとの縫合ひ、まかし春待つ身に取れば中々の心嬉しさ。 こゝも矢張り其組にや(か)、火桶を中に三人は少女が何れも美服を仕立てながら、喜色滿面に(ケヅル)樂しげ(さうよ)何やら語ッて居る、其聲もおのづと春めいて(ました)。

「花子さん、貴孃の御召しは大層御美しいことね。 何でを摸樣は? 梅に折鶴。 どうもまアいゝこと。 貴孃がお召しなすッたらさぞ(ケヅル)どんなにお似合ひでしやう。 あらほんとよ。」

「へエたんと油を塗ッて頂戴……は丶〳〵其れよりも貴孃のと余程よくッてね。 全体暗染めで優美で高尚で、貴孃の様なおとなしやかな方には大變よくうつりますもの。」

「はゝ〳〵そんな盲ひ合ひはもう好しにしましやうわ。 ちッとも縫へませんもの。」

花子は獨りにこ〳〵しながら、

「さと子さん。 出來ましたわ。」

「もう御召しが?」

「いゝえ此間は春衣裁縫……えェ文章よ。」

「まアさう……妾は御召しをもうおこしらへなさッたのかと思ッて、ほんとに驚きましたよ。 酷い方!」

「だッて貴孃出來たんですもの、仕方が有りませんわ。」

「は丶丶まアむッとして……其れぢやアどうか拜聽を!」

さと子の傍に先程から袖丈けなとさして、反物を裁つに余念のない鶴子といふ娘。 今之を聞くと等しく、剪刀の手を止めてしとやかに、

「妾にもどうか……」

花子はしきりに乘地になり、

「えへんなにも別に是れと云ふ程の物でも無いんですが」

一寸氣を變へ、

「新年にも又かるた取ッて遊びましやうね。 皆さんも是非入らッしやいよ。 其れ迄には此着物を縫ッて、わ〳〵嬉しい事、早くほんとに着て見たい(わ)。」

「おや何のと思ッたらあらいやよ。 ごまかしちやア。」

「おほゝゝどうもつられたらしく思ッたら果して。 ねエ鶴子さん、どうせ妾共を好い材料にして。 御自分が主人公で……」

「あら彼んな事と……まさか。」

「ほゝゝどうだか。 して見ると妾共も文中の人ですかねエ?」

以上三章第三等賞

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

日本音樂史稿（六）　準縄子

厭　舞

厭舞又た振鉾に作る。凡そ舞樂を隙する必ず先つ此の曲と奏す。左右舞者唐裝束を着し鉾を以て舞ふ。振鉾三節左と先にし右を次にす次に左右共に之を振て壽詞を唱へ左方ハ新樂亂聲を奏し、右方ハ高麗亂聲と奏す　殘夜抄教訓抄体原抄

八　佾　舞

此舞ハ何れれ頃にありしか、又た如何なる舞形か其記傳と書きしもの見えず。

榊　舞

榊舞ハ毎年四月十二日常陸鹿島奥宮沼尾坂戸社息州社その他か末社の祭ありて畢る。毎に直會例の如し。次に榊舞あり其樣ハ横笛を吹き笏拍子をうち榊れ枝を挿て舞ふなり。

神　遊

按するに古今和歌集に神遊の歌を載す。皆神樂の歌なり。然れハ神遊ハ則ち神樂れ一名あり。凡そ遊とハ樂を奏するの古言にや東遊御遊の類其他古き物語に某を遊びてと云ふも皆此の樂の名なると知へし。

黒山企師部舞

續紀稱德天皇天平神護元年閏十月己丑朔中略庚寅詔ニ文武百官㆒令拜㆓賀太政大臣禪師㆒事畢幸㆓弓削寺㆒禮㆑佛奏㆓唐高麗及黒山企師部舞㆒といへり企ハ玉篇に去智切とあり。恐くハ吉志と通そるか。然るに黒山れ義ハ未た詳ならず。

東　遊

白石の樂對に日く東遊と云ふとハ和舞の中にして風俗の部の一なり。其始め安閑帝の時駿河の有渡郡有渡濱に神女降りて舞遊ぶ事ありしに起きり。故に駿河舞とも云ふ又た此駿河舞と求子とを奏するときハ諸舞と云ひ駿河舞のみ奏するとそれハ片舞と云ふ。文化十年三月十五日石清水臨時祭御再興の時兼て再興ありし由其調ハ高麗双調を用ふ。

鳥子名舞

伊勢神宮にて奏する古舞なり。其の起始ハ元々集に見へたれ共少しく附會の如し。又た舞式は延喜伊勢太神宮式の部に凡そ三節祭並に解齋直會の日鳥子名舞童男童女十八人裝東青摺衣裝仕前榻備臨祭給之料布十二端男二丈八尺女二丈五尺彈琴二人笛工二人歌長三人料布三端二丈人別二丈年終各給其身と有り

風　俗

今昔にて唱ふれ共又たクニワザとも訓せり物語などにハフゾクとも唱ふもと諸國にて民の口ズサミにせし歌曲を採擇して大歌所より進め公事に用ひられしと見えたり殘夜抄に大嘗會にハ和歌所にて祝ひの歌を詠して奉りたるを風俗所に下して歌の振を付て其歌の聲振に隨て悠紀主基の樂人樂を作り左右の舞人舞を仕るへきとかや云々となり古今樂雅抄にハ風の字をふりと訓せり又た風俗に方樂と記したるもの國史に見ゆ訓ハクニワザと云ふにや續紀天平元年六月庚辰薩摩隼人等貢㆓方物㆒癸未天皇御㆓大極殿閤門㆒隼人等風俗歌舞云々又云天平七年秋七月己卯大隅薩摩二國隼人二百九十六人入朝貢㆓調物㆒辛卯天皇御㆓大極殿㆒大隅薩摩二國隼人等奏㆓方樂㆒云々

今　樣

今樣ハ吉水院樂書に殊に流行るハ後朱雀院の御時よりありとあり然るに其濫觴ハ郢曲相承次第に見えたり曰く今樣者敏達天皇御宇土師連八島歌始㆑之著㆓赤衣㆒入㆑夜則歌㆑之其聲甚絶妙也及㆓曉天㆒星雖波浦化不㆑見天皇奇㆑之被㆑尋㆓中聖德太子之處㆒是熒惑星也云々時人學而翫㆑之其後廢而山陰中納言再興歌之仍号今樣或号新樣也其後天曆聖主第十姫宮号宮姫爲㆓東國青墓宿長者㆒今樣堪能也天下今樣皆被㆓余流㆒也彼時中郷齊政皆翫之ときえたり百練抄に承安四年八月十日上皇御㆓移徙七條殿㆒破㆓本舍屋㆒被㆓新造㆒中略九月一日於㆓太上法皇御所㆒法住寺有㆓今樣合事㆒撰㆓定堪能之輩世人㆒十五個夜毎夜一番被

レ決二雖雄一師長資賢卿等爲二判者一十三日仙洞今様合之次有二御遊上皇令レ歌二今様一給希代之美談也とあり此の事吉水院樂書にも見えて按察使大納言資賢卿の今様等と載せたり催馬樂等は其章曲を記せるものなきも共今様は別に譜とも筆記せしものありや未だ詳ならず

朗咏

今按するに朗咏は催馬樂風俗の一變せしものにして漢土の古詩を諷詠し斷章取義を爲せしか如し其撰は四條亞槐公任卿に出るとき北村季吟の和漢朗咏集註の序に曰く

朗咏者、厥風起二於催馬樂風俗之後一而、我邦中世以降、上自二朝延一下逮二郷黨一歌二謠之一者也、勝夫孫興公天台山賦云、朗咏長川季固翰註、文選云朗高也、李善云朗猶二清徹一也、宣哉一高二詠之一則心思澄徹、其所レ據良有以也、抑此集也、當二一條帝御宇一亞槐公任卿所二撰集一也、其語巧而意達、其章文、而旨、深實是鷄鵡之舌平鳳凰之毛乎其作者兼二備和漢一尤傑然者也、和漢朗咏集号、由是而起焉

と記せり今傳ふる所は藤原基俊公の新撰朗咏集に巻則ち之れあり

郢曲

郢曲は朗咏の一名なり（又た郢律と云ふ一説には郢曲とは總て歌を謠ふ事の總名なり催馬樂今様其他何にても歌ふ事あり郢曲とて定まりたる歌はなきなり云々） 文選鮑明遠翫月城西解中詩に蜀琴抽白雪郢曲發陽春レ李善註に客歌二郢中一故曰二郢曲一とこへたり客歌二郢中一とは宋玉か賦に出たりまた徒然草に梁塵秘抄の郢曲こそ又たなれきなるとなり野槌には郢は楚國の都なりとなり郢曲撰要なる巻は正安三年沙彌明空の撰のよし宴曲集等數部を類聚せしものなり東鑑壽永三年十一月六日條云於二鶴岡八幡一有二神樂一武衛參給御神樂以後入御別當坊依レ奉請也別當自二京都一招請兒童号總持王去地下着是郢曲達者也以之爲媒介所勸申盃酒垂髮吹横笛梶原平次付之又唱歌畠山次郎歌二今様一武衛入興給及晩令還給云云とあり此の他

朝倉　本筑前の風俗にして清和水尾の時神樂にこれを入

其駒　本は風俗なり延喜の時神樂に入れらる此は本は催馬樂なりと云ふ説なれ共風俗の説或は眞ならん

足柄　足柄明神は神歌なりと云ふ目出度た者なり村上後冷泉一條院の御時より弘まると云へり

黑鳥子

駿河國

コヒヤヒ

古柳

法文歌

波羅林　今様の一体にして法文歌は類なり

等なれ共煩をしければ略し又

外邦傳來樂 ─新羅樂 ─百濟樂 ─呉樂 ─高麗樂 ─渤海樂 ─林邑樂 ─隋唐樂

神后皇后三韓を降服せしめ玉ひしより後は彼國も本朝に往來しつゝ終には其國樂をも傳へたりとみゆれ共其始を詳にせず

新羅樂　允恭紀四十二年天皇崩時年若干於レ是新羅王聰二天皇既崩一而驚愁レ之貢二上調船八十艘及種々樂人八十一云々皆素服之悉捧二御調一且張二種々樂一自二難波一至二于京一或哭泣或歌舞遂參二會於殯宮一也と是れ此樂の史に見へたる始なり

百濟樂　欽明紀十五年百濟遣二下部扞卒將軍王貴上部奈卒物部鳥等乞二救兵一中略別奉レ勅貢二中略樂人德三斤季德己麻次季德進奴對德進陀一と百濟樂と云ふとの史に見へし始めなり

呉樂　推古帝二十年百濟人味摩之歸化日學二于呉一得二伎樂舞一則安二置櫻井一而集二少年一令レ習二呉樂舞一於是眞野首、新漢齊文に人習レ之傳二其舞一云々また聖德太子傳暦に此時のことを太子奏勅二諸氏一貢二子弟壯士一令レ習二呉伎一又下二令天下一擧レ皷

習レ舞太子從容謂二左右一曰供二養三寳一用二諸蕃樂一或不レ肯二學習一或習而不レ佳而今永業習傳宜レ免二課役一則令二大臣奏一免レ之とあるハ呉りの史よ見へし始め幷ふ外蕃樂を傳習せし始とも云ふ可し

高麗樂　天武紀十二年春正月丙午是日奏二小墾田舞及高麗百濟新羅三國樂於二庭中一とありて高麗樂れ名始て史よ見ゆ然れ共体源抄に昔推古天皇の御時よ初めて高麗國より舞師樂等渡る其後大唐高麗共よ奏す云々とあれバ既に推古の朝に高麗樂をも傳習せしよや

渤海樂　渤海とハ三韓の地名なり或ハ高麗の一種とも云ふ一名を靺鞨とも云ふ之れ天平の頃に傳ハる今代新靺鞨と稱する樂ハ此の靺鞨の變成よハ非るか

林邑樂　元亨釋書に釋佛哲ハ林邑の人也欲下入レ海索二如意珠一行中販濟上便乘レ舟泛二南海一没レ海啓空レ手舟又破時破羅門僧菩提適赴二震旦一海中逢レ之哲伴二菩提一來、天平八年七月也本朝樂部有二菩提拔頭一等舞及林邑樂一者哲之所レ傳也とあるにて知る可し

隋唐樂　の傳來ハ未た判然せされ共其交際ハ推古帝十五年小野妹子を隋よ使ハすと之れ則ち遣唐使の始なり（是以前に僧徒なども隨分往來せしならんが國史には見えず）後ち廿六年に隋亡びて唐室となるも遣唐使の往來繁盛なりし故よ樂も亦た此遣唐使か持來せしならん然れ共唐樂と云ふ名の見へしは文武帝の大寳令に在るを始とそ又た平城帝大同四年三月の條に大唐樂士十二人を定む（類聚國史）となきば此頃には既よ大成せるものあらん

雅樂寮

雅樂寮ハ文武帝大寳令を定め玉ふに及んで始て置かれ和漢三韓等の樂を總轄せしめたり又令義解に雅樂寮頭一人掌下文武雅樂曲正舞（無干戈曰文有ーー曰武）雜樂（謂雅樂正舞以外雜樂也）男女樂人音聲人名帳試二練曲課一（謂音聲曲度各有大少課二）其程限一試二其成功一也學上助一人大允一人小允一

人大屬一人小屬一人歌師四人掌レ教二歌人一歌女師二人掌二臨時取下聲音堪二供奉一者上教レ之歌女一百人樂師四人掌二雜舞教一也舞生百人掌習雜舞笛生六人掌雜笛習笛工八人（謂供此國樂而吹笛者其唐國以下諸樂者吹笛之人各左其樂生中也）唐樂師十二人掌教樂生高麗百濟新羅樂師准之舞生六十人掌習樂高麗樂師四人樂生二十人百濟樂生二十人（恐くも百濟樂師四人の六字脱?）四人樂新羅樂師生二十人伎樂（謂呉樂其腰皷亦為呉樂之器也）師一人掌教伎樂生其生以樂戸爲之腰皷生准之腰皷師二人掌教腰皷生使部二十人直丁二人樂戸とあり又た是より以前天平三年七月乙亥に雅樂寮雜雅生員を定めらる則ち大唐樂三十九人百濟樂二十六人高麗樂八人新羅樂四人度羅樂（度羅或は耽羅と書す此ハ朝鮮濟州の地名にして此舞は此に始て見ゆ）六十二人云々となりたり玆より連綿として絶えす今ハ雜樂所と稱して宮内式部職中に屬せらる

隼人歌舞

隼人ハ歌舞之吾田　今の薩摩大隅の二國を云ふなれ共舊ハ隼人より起れり日向高千穗宮の世よ彦火々出見尊の兄火闌降尊自ら屈服して今より我子孫は汝尊の晝夜守護人となりて仕へ奉らんと誓ひ犢鼻褌を著て赭を掌ふとり面にぬりて俳優となると神代卷に載たり（嬉遊笑覽には艾折命その兄火照命を汐滿珠を以て溺らし若め玉へるよ依て子孫長へ火芹命の守り人とならん云々と有）其苗裔吾田熊襲ハ十運師の民と交番よ皇居の守護人を勤め宮牆の傍を衛れ吠狗に代りて奉仕せり後に阿多隼人大角隼人の姓を賜ひ儀衛ふ狗吠を發す此吠聲と萬葉集よ隼人れ名よ負夜聲イナツクなと、あり之れ一種の音節ありて歌謡に類し或ハ蹔蹕に擬す延喜式（隼人式）に凡行幸宿を經る者ハ隼人吠を發す但し近幸には吠を今來隼人は大衣隼人として吠と習てさしめ左て本聲と發し右て末聲を發す大聲十遍小聲一遍訖りて更よ細聲を發する二遍とあるなど稽ふへし

隼人れ歌舞音樂は上代よ於ては其詳かなると得て稽ふるに

由なし天武天皇十年七月隼人來朝して方物を獻し大隅隼人と阿多隼人と廷に相撲し後ち隼人を飛鳥寺の西に饗せられ樂を奏し士庶をして縱觀せしむ又持統帝の九年大隅隼人を饗し隼人相撲を西槻下に觀る是等ハ隼人の相撲及ひ奏樂の國史に見えたる始とす

大寶令に隼人司ハ衛門府に屬して禁門を守りしあり正一人ありて隼人の名籍を撿校し歌舞を敎習し竹笠を造らしむるを掌とると是隼人の風俗歌舞ハ雅樂寮の舞樂とハ全く別にて又神樂とも異にして久しく隼人司の下に支配と受け之も敎習せ是れ其源ハ大隅薩摩に隼人なるの歴あり 新井白石の俳優考に雅樂寮雜樂の一ならんと云ふハ非あり 元明天皇の時唱更平く 唱更ハ薩摩の舊名にて讀こと隼人仝 和銅三年正月重閣門に御して弓樂を奏せしむ元正天皇の時大隅平く養老七年五月大隅の隼人を饗し十風の歌舞を奏せしむ爾後隼人の風俗歌舞を朝に奏せしと國史に數々見ゆ

隼人ハ大宰府より撰擢し交代に京師の番を勤む之を番上隼人といふ家族を率ゐ新に上來るを今來隼人といふ故に隼人に女もあるなり延喜式 隼人式 に今來の人にハ時服及ひ鹽を給すとなす蓋し隼人の技藝材幹なるものハ隼人司之を京師に召して移住せしめしなり姓氏錄山城の神別に阿多隼人なり大和の神別に大角隼人あり隼人式に五畿內及ひ近江丹波紀伊等國の隼人とあり隼人の近畿に移住して其風俗歌舞或ハ相撲を敎へたることを以て推考すへし

桓武帝延暦二十年大宰府より隼人を進むるを停め平城帝大同三年定額の隼人欠くれハ京畿の隼人を補せしむ其女ハ此限に非すと類聚國史に見ゆ是れ薩摩大隅隼人の俳優漸く近畿に移徙して本地に跡を絕ちたる由來あり

隼人の風俗歌舞ハ初め本地にて敎習し隼人司にて管轄撿校し之を朝廷ハ大儀に用ゐらるゝは古時の典禮にて交替の時も必す其風俗歌舞を奏せしに桓武帝延暦二十四年之を停められ爾後は唯朝儀に用ゐるを式とす隼人式に元日即位蕃客入朝の式にハ隼人の官人當色の横刀を著し大衣及ひ番上隼人は當色の横刀白赤の木綿と着け自余の隼人は皆大横布の衫襟袖に兩面の襴し緋帛の肩巾に白赤の木綿と耳形の鬘を著け盾を執て並に胡床に坐すとなるにて隼人の風俗歌舞の衣裳一班と見るへし又云踐祚大嘗會にハ隼人應天門外に陣し初入に吠聲を發し官人並に彈琴二人吹笛一人擊百々四人拍子二人歌二人舞二人等與禮門より參入し御在所れ屛外に北向に立て風俗歌舞を奏すとなるにて其樂器の一班を見るへし此中彈琴吹笛ハ我邦固有の樂器なり拍子は拍子木なるか擊百々とハ何樣のものあるか

斯の如く隼人司にて管轄敎習したる風俗歌舞ハ延喜の頃迄ハ朝廷の大儀に用ゐられしに何れの世に廢りしや終る所と知らす

猿樂

沿革　新猿樂　新猿樂の坂　藝　謠曲
猿渡しの傳說
狂言　勸進能　神事能　禁中御能　謠
作者　脇師　神田神事能　樂器　謠本

隼人廢りて猿樂起れり此の猿樂なる字義に付きてハ先輩種々に論したり左に其一二を記せし

猿樂ハ元と散樂の仮字なり散樂ハ莊子に散木とある散の字の散の如く散位の散も仝意にて正体もなき意あり 嬉遊笑覽

猿樂ハ二條院の御宇に樂の前と云ふ內裡の女房なり中路猿來て結契男一人生此の子面休五体人あり最上利根にして一字を聞き十字と覺ゆ中略常に朝廷に躍て叡感を蒙

（未完）

幕府時代の奥女中 （二） 天保老女

御召抱人支配女よと心得申渡しの事

一御家法通り相心得申様の事
一唯今まで他の御殿相勤居候振合よつとめ申間敷尤も他御殿に競べ申間敷候事
一言葉づかひの事附り忌ことばの事
一御役割の外一切手出し申間舗け事
一諸見せ物娼家俳優の事申聞しく候事
一行儀見ならひ申やう申わたしの事
一同勤一和致候やう申わたしの事
一衣服身拵ひ等百五十日の内よ御定めに改め申候やう堅く申渡しの事
一惣女中とも御番相勤めるうちハ一切局元と立より申間敷又部屋へ參り候事當番の心得方にハ是ゐく候事
一御番相勤め候うちハ少しも渉用欠申さぬやう一統つねぐ心得申べく候事
一手水場着替所と元より建置れ候儀よて部屋へ立越申筋ハ丞御奉公人にれゐてハ猶さら有まじく候尤も着替れ時刻よハ末女より部屋ぐへ申通じ若替所へ持來り候やう致すべく又女ども着替持來着替所へ參り居人ぐ主人の着かへゐたさせ引取り申べきやうそれぐ申渡し置るべく候事

當番女中刻限の事

一晝番ハ辰れ時より未の刻までの事
一夕番ハ未の時より戌れ刻までの事
一朝番ハ昨戌の時より今辰の刻までれ事
一晝詰ハ己の時より申の刻までの事
一御夜詰ハ申の時より亥の刻までの事
一晝人役の面々ハ辰の時に出巳れ刻に息ひ午の時よ出未の刻に息ひ申の時に出酉の刻ゐ息ひ戌の時に出直に明朝まで相勤め申べく候事

一兩人勤ゟよハ一人晝番ゐたし一人夕番致し候内一人息ひ朝番に出申べく候事
　但し今日夕番の人明日晝番致し候筈の事
一三人勤めにてハ晝番を立て非番のもの御夜詰いたし候筈の事
一四人勤めにてハ二人づゝ晝夕と相勤め候筈の事
一五人勤めにてハ晝夕朝晝詰御夜詰と致し相つとめ候事
一六人勤めにてハ晝夕朝兩人に致しつとめ申べく候事其余是に准じ相勤め然るべく候事

天罰靈社起請文の事

一御奉公疎ゟ存じ奉らず幾重にも御忠節に相勤め申べく候事
惣体　御隱密の儀ハ勿論　御前向の儀ハ一言よても沙汰仕る間敷候事
一御上の儀わしく取沙汰承り候ハヽ早速言上仕るべく候事
一何事によらす　御尋ね遊さゞ候ハヽ親子兄弟の儀よても有様申上べく候事
一何事ゐよらず　御用の儀ハ依怙贔負仕る間敷候事
一怪しき藥の類とり扱ひ仕るやうの品脇にても取ゐつかひ仕る者候ハヽ早速言上仕るべく候事
一御上沙汰の儀内證を以て人に頼まれ申まじく候事
　附り内證を以て贈ゟものとを請ゟ申間敷候事
一諸女中の手前ゐげ日向の取捌え仕るまじく候事
一男子へ對し猥りある振舞仕る間敷幷に余人の文とり扱ひ仕るまじく候事
右九ヶ條相脊き申間敷尤も諸御規定通り堅く相守り申べく候事

老女役

年号月日　　何　女㊞

天罰靈社起請文の事

一御奉公ゐろそゐゟ存奉らず幾重ゐも御忠節に相勤め申べく

候事
一御預け置せられ候御道具類都て入念に御取扱ひ申べく候事
一御預ヶの御品〳〵毛頭盗取申間敷候事
　附り置所を知らせ盗取らせ申間敷候事
一御隠密の御品もの一切他言仕らせ間敷候事
一惣体　御隠密の儀ハ勿論
　御前向の儀一言にても沙汰仕まじく候事
一御上の儀悪敷取沙汰承り候ハヾ早速言上仕るべく候事
一何事によらず　御尋ね遊ハされ候ハヾ親子兄弟の儀にて
　も有様に申上べく候事
一何事によらず　御用筋依怙贔負仕るまじく候事
一怪敷類の類取扱ひ仕る間敷候若し左様のし私脇にてもとり
　扱ひ仕るもの承り候ハヾ早速言上仕るべく候事
一御上沙汰の儀内證と以て人に頼まれ申間敷候事
　附り内證を以て贈り物とう請申間敷候事
一私意恨を以てり嘲そしり申間敷候事
一男子へ対し猥りがましき儀ハ勿論文れとり扱ひも堅く仕る
　間敷候事
右十二ヶ條相脊き申間敷候尤も諸
御規定通り堅く相守り申べく候事

年号月日	若年寄役	何女㊞
同年月日	御中臈役	何女㊞
同年月日	表御小性役	何女㊞
同年月日	御小性	何女㊞
同年月日	御側御次	何女㊞
同年月日	御揃御次	何女㊞

右舊幕時代れ奥女中の最初の方は一寸昨年の第七十四一にも出しましたが讀みつゞきの便を料り、此号でも累ねました…………………いらつめ記者

新流行二三

堆朱れ櫛

堆朱は誰も知る通り朱漆をかつく本へ塗ッたもので何にしても上品な物です。昔この櫛が流行しましたが一時すたれてまた近頃では再燃を吐き出しました。尤もまだ多数の流行をを得ません。が、前後をかへりみるに、鼈甲でも護謨でも從來の物は大きに珍らしくなくなッて人々れつれも新物を望んで居た矢先或はこの後流行して來る事でしやうか。

婦人結髪のタボ

今の東京の婦人髪は非常にタボを出す事が大流行です。從ッてタボどめの必要がれいて回り、甚しいのこ両鬢に二つ、タボに一れ、都合三つ以上のタボ止を付ける人さへ有ります。

ピンれ襟止

半襟どめは洋服附屬品のピンを用ゐ出したのが此頃のはやりでそ。從前の蝶よりハ上品です。小間物屋の中には簪の頭を取り其まゝ細い足にしてピンに擬して賣りそとしたのも有りまそ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

頭痛の療法について

頭痛のためにはよく頭を休めるのが第一の手段です。土臺が頭痛は腦髓が恐ろしく刺激興奮して起るもの、そを故に落付けるよ上越した事も有りません。多忙の人なぞは之と無理と言ひましやうが、欺されたと思ッて試みて見ればいゝのわるいのは分ります。靜よ臥して頭を休めるれは頭痛のためつまらぬ賣藥二三服呑むよまさる事です。

婦人の愛らしさ　りう子

天の化成した愛嬌の分身即ち婦人、その愛らしさが歳月年齢に因ッて增減すると云ふのは僻論です。生れ落ちてから棺を蓋ふまで婦人れ愛らしさといふ物は決して衰へるもので無いでそ——其心さへ純潔ならば。紅も白粉も夫ぞ天賦の愛らしさを唯助ける丈の物、紅や白粉で愛らしさは決して加はる物では無いでも、之で加はると思ふのは眞の美を知らぬ人の言草です。

十八歳頃の婦人の愛らしさはあどけなき處、即ち不經驗、純潔なぞといふ處が大に色を添へるので、猛惡の男子とそもそも之を手遊物にして玩ぶのです。以上二十二三歳頃迄の愛らしさは世に馴きて來て、思想も大に決まッた、言そい締りの付いた愛らしさです。以上二十五六歳頃迄には大概の婦人が子とも持ち、從ッて母の慈愛といふ處を實地に經驗する初めである、つまりは此頃の愛らしさも其慈愛を含んだ愛らしさです。以上慈愛、親愛、親切、溫和なぞの美德も自然々々進むとも無し進むもの、廿五六歳以後れ愛らしさは其實まッたく愛らしされ完美完全な處へ進んだのです。

頓智

頓智で禍を福に轉じた例はよく有りますが、是も其一つ、ある處でお客が幾人も寄ッて會食の有ッた時下女が手過ちで美事な大皿を食物の入ッたまゝ入口の廊下へ落し凄まじい音をさせて微塵に碎きました。其皿は其家れ奧方の秘藏の品、客も一同一句も出ず何れもひやりとして興も何も覺めた途端、其奧方が斯う言ひました、「厄おとしでよかッたよ。けれどそンな音をさせるとはお前にも似合もない下手なお話だ。」是で一同思はず吹き出し、座敷もやうやく賑やかなりました。もしも此處で席をも憚からず口ぎたなく小言でも言ッたならそれこそ奧方も平凡な人なのです。

米の揚物（以太利料理）

米の揚物は以太利で行ふ一種かはッた料理です。　其法、上白米を牛乳で白粥に煮、少し鹽を加へて味をつけて置き、更に温飩粉を平板の上に一分位は厚さに平たく布き、其上に右の飯と三分ばかりの厚さに同じく平たく掩ひ、丸棒で上をうまく押して平かにし、冷めるとやがて煎餅のやうに固まる、それを好みの形ちに切り、狐色になるまで油であげ砂糖なり酢なりを用ゐて食べるのです。

家事雜則

釜　鍋に炭煤が澤山たまると物の煮えが遲し。

澤山釜の下へ焚付をくべると却ッて火の手は弱し。

引火奴は成るたけ細く裂いて使ひ、マッチも成るたけ函の藥をすりへらさぬやうするが經濟の一つなり。

靴下のやぶれて役に立たぬはよく洗濯してランプは心に縫ふべし、甚だよし。

密柑の古籠はサヽクレを取て張るべし紙屑籠に甚だよし。

端書の古きは集めて置きて敷紙の張込に妙あり。

文學小言

韻文に端唄口調

端唄の口調は野卑と断言出來る物でも無い、それで端唄をなぜ野卑と言ふか？　唯其意匠、それが野卑であるからでも。　肉体口腹は慾より外知らぬ艶女治郎の心腹が端唄從來の意匠の多數、其口調と取ると同時兎もそれば意匠迄取るのは以ての外の事です。　吾々は今後の韻文に端唄口調の入るのは許す、しかし意匠の入るのは許しません。

好色の文字

好色の二文字大悟めかして用ゐるだゝ俗です。西鶴を敬慕する人達が近頃之を冠にして恥とせぬ、思へは世中は勝手なものです。故事附の辨護は無用、虛心になッて切めて思ッて見るがよし、好色の二字は其實純潔な思想で用ゐ來らした物でも無んです。

文の上下

精細が文の上品か、跌宕が上品か、それと何れと定めるのは抑偏頗極まる論です。精細と以くするとも、跌宕を以てするとも其よく人さへ感動し得さへすれば文の能は了るのです。此事分明な事實ながら、扨世中は見す〳〵之を忘れて偏頗な論を言ふ人が有ります。

寄書

再び撰澤の君へ　　三阪さぬ（ヒサカ）

尊嚴を瀆すの罪も顧みず、胸に立塞ッた狹霧の有耶無耶に一篇の晦澁文字を弁べく折角の御示敎と仰ぎました、其以來年を跨げて早茲に二月計り、「なゝ敎ふべしとは見られぬものか」とも思ッて居ました折も折、いらつめの七十六號いつもの通り嬉しさに封とく〳〵開けば、御手に成ッた「妾へ」との滔々幾千言、見るからが風共日共思はれて迷ひの露れざやう な心地もしました、御懇篤な御志どう忘れましやう。實に此度の御諭は先に引換へ明詳委細噛んでくゝめるやうな撰梅、妾等に玉はりまそのは何時も此樣にありたいものです。譬喩――譬喩は物の了解と助ける唯一だとやら、それさへ所々に交へては御親切、骨身に沁みて有難く思ひました、が尙如何のと―妾一人かも存じませんが―思ふ箇所が無くは有りません　固より御病氣後まだ日も立たぬ今日此頃　愚かな身作られ　失禮とは存じて居りますが　幾百里隔ッた都と鄙とは悲しさ　親しう御目もじの下に御說と得聞けぬため　敢て更に此處物申す次第　が「淨敎授と受けた」などゝは夢にも仰

ッて下さいませんやう是亦御祈り申します
扱御文中の「文章の一定しないのは文學の一定しないのだといぬても差支ない位」との御言葉ハ文字外に深い意味が有ッたのだとのこと、妾等ハ文章の一定しないのが文學の進歩に莫大な障礎を與へてゐる、それを御歎きなされたのかと思ッて居たのです　何か人を欺んく論を立てたやうにも取れましたりう　全く天性が推理などの智力と少量しか與へない女性の中の其一人　今更顧みて身を恨む計りです、此度はかよわい乍らも限りの力で拜讀いたしましたが、分り兼ぬるのハ先づ「文章が亂れて居ては文學に種類が有るやうに」「之を詳しく云へば文學の性質が分らぬやうな心地もする」との御言葉です、此處の亂れてといふ語ハ慥に前の關係から考へれば、文章の体裁即ち言文一致とか漢文とかが色々なるのを指さゝれたもの　其ために何故文學に種類が有るやうだと仰ッりますか?　文學の種類ハ固より一つで無い　なればこそ「文學一定」の御言葉に迷ッたのです、其文學を把ッて或一種類の其外には發達成長を御望みなさらぬ御所存ですか?　又文章の体裁が數多いため文學の性質迄分らぬとハ極端に失した言でハありますまいか、文學ハ其用ゐられる塲合の數多い—言葉を換へて申せば—色々の目的に使ハれるもの、で其性質も明白に得知れぬため西洋などの學者も定義を下すに困るとやら困ッたとやら、性質が分らぬならバ文章の体裁が一つで有ッても仝様のことでしやう、其様な理合てハなりますまいりたらよい尚細かに言ふて見れば」との前證と譏いて詩をへ「と」ありましたが「と」の誤植だと思ッて〜書くゑハ文章ハ極ッてゐるが文章と書くにハ其体裁が極ッてゐない即ち日本の文學ハ体裁が極まッてゐないとの意だとのこと　文學の体裁といへは正しく文學其物の体裁！—尚今一際會得お鈍い妾ハ小首を傾けますが先づ措いて　文學と表彰する文章と文章に依ッて表彰せられる文學とハ其根本から違ふもの、共用に「一定」などとの文字ハ決して使ハれますまいとのあとを再言し置きますと仝時、其「文學が文章だと言ふことも出來ねバ文章ハ文學だと言ふことも出來ない」との語が何故前回に御出し下さら無かッたのと今更恨ゝのやうにも思ひます

第二段では迎へた心かは存じませんが痛く無い腹を探られたやうな心地もしました、本志と打明けるにつれての緊要文字（紙上に斯く表ハれたこと諸嬢にも……）とくと御覽下さいませ、如何にも御説の如く言文一致主義の人ハいくらもありません、又言文一致の新聞雜誌も仝様のことです、見るにつけ聞くにつけあゝ情無いと思ふ感情の熱度ハどれ程の高さか

いつぞやも學校で國語科擔任の先生が語格の講義中俗言の段で支離滅裂の言葉を把ッて「あなたハ御熱心だとやらですがね…言文一致は…」との攻撃論難　衆人稠坐の中のこと覺えずも頬に紅を潮したことさへありましたが　怒られやうとも笑はれやう共！とは妾の渝らぬと心に誓ッた決心　友の諸嬢達との往復の書簡は固よりのこと塲合の許す限りは言文一致の主義を取ッてゐるのです「命かけて」と申したのは心から出た誠の言葉なのです　しかし熱心と筆の運びとの伴なハぬ是非も無し！今の作のやうな作の一つも背けぬのぞ先刻御承知の通りのこと　其身を以てどう誹謗せられやうとも其人に對して　放慢無禮なぞとは—御推察も事によるよ！—との口を以てまア申せましやうか　唯其「二三名家を除く外は見るに見られない—との御言葉について申したも　歸する處は御同様—吾邦唯一の文章と満足する地位に立至ッて居逃ねからのこと　満足が出來れバ御論も出ぬこと、妾等迚何を述べ立てましやう？しかし満足の出來ぬハまだ成長に伴なふた歴史も持たぬ位の言文一致、無理とゝ見られますまい、既前見られぬあらバ餘りの御貶黜は如何のことでしやうか　にに申し上げた如く此言文一致の筆を執るが言文一致を普通ならしめる好手段とも思ひ居る妾　其矢先のことゝて仰信的に筆を執ッてゐる同志の志氣を沮喪するに餘りある鋭い御言葉とも思ひましたまゝ申上げゝ次弟なのです　どうぞ惡しくハ思召し下さいませな

雑語を用ゐることについての御解説は第三段で拜讀致しました、妾の言文一致についての」注意として又約束として禁じなる條件を打拾てゝ擇はぬものは—云はゞ—言文一致外の徒」と云ッた言葉に對して左様な手酷い眼でハ見られぬとのこと　此處見得られるが見得られぬうゑ亦暫く措いて申しません　翻ッて御尋ねいたしますが信屈難澁な彼の漢文を直譯してそれが「です」「でしやう」に語法を假ッたならば早それで言文一致ハ成上ッてゐると思召しますか？　如何は御意見か承りたう存じます　妾等迄前段に申しました通り固より文章にハ拙いもの　漢語を用ゐないですむのに漢語を使ひ和語を入れないで濟むのに和語を當嵌めてはゐましやう　それ乍ら尙此般の注意約束ハ體認してゐます位ですもの！　倘更に「打拾てゝ擇はぬ」此語に能く御眼を御止め下さいませ　思ひの外に過ぎることもありましやうか

杜撰に言語を使ふのは日本語の打交ッてゐるのが一つの源因とハ妾とて認めて居ります　なればこそ「これが言文一致の上に少なく無い關係を與へてゐる　どの道或る手段と假ッて

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

矯正の勞を取らねばならぬ」とも申したのでを　「御思直しを」（御文中の日本語の交ッてゐる「故」とハ思ひ直されません…此「故」の字は「外」の字の誤或と誤植と思ッて）とい申し上げませんつもり、文が分らぬからでしやうが先づ能く前回のを御推讀下さいませ　殊あ言文一致に用もる言語は極ッてゐるかとの御尋ね　固より極ッてはゐません　妾と唯其礎の言語のえ　荒まし勢の趣く處によッて指定さをてゐるでしやうと云ッた計り　其礎｜當らぬかと存えませんが｜喩へて申せど家の心杜　それ一つを見て家の建築材が揃ッたかとゝ尋ねあさるのと｜失禮下ら｜全様かとも思ひます　それ故假設よ問答法を以て文に激しい勢をつけられた十五丁上欄の末から下欄の初へあけてのゝ論も姿に向ッては格段の威じも惹起させません　がゝ論に對して懐抱する丈い敢く發す所なく逃べさして頂きましやう　固よりゝ説の如く年月を發さないで誰にも書んたり論んだ　出來るのは言文一致が有する利益の一つです　が口から出任せ轉訛方言も擣ひなく筆に走らしては｜申す迄もなんことでそが｜今の處通じぬとんふ困難が附經ひます　通せあいでと思想を如何して廣くの人に傳へますか？　思想を人に傳へ得ぬ！　其言文一致い何處に効益が有るのですか？　効益れない言文一致それでも「其地方の言葉と寫したのだからいゝ」と　ゝ滿足とよもやあさりますまい！　東京地方の言葉を知ッたものゝ爲めでもなく西京地方の言葉を知ッたもの、ためでもなく全く日本言文一致｜一地方丈にしか通じぬやうなのでと　詮が無いでハありませんか

日本語としてよいう惡いか分り兼ねるのが有ると仰ッるれが妾にはは得解せんと申したについてのゝ答辨、妾の文中よ一例しか使は無かッた其洋語をを直ぐ檎としてのゝ手際まこと感嘆の外有りません　がコンモンセンスは果してコンモンチッスの間違ひう　又　語の果して日本語に全化してゐる度合の如何かは敢て述べ此必要もなまません　一たび國民之友第四十号三十三丁を繙るて美妙先生のゝ文でもゝ通讀あさいませ其他ゝ注意次弟でれ幾らも此語のゝ目に止まるおともなりましやう　しのし穴へ入る迄もとの文學ゝ熱心家　此語が分らぬといとうにも受取れません　が倘或い此處知らぬ風と粧ッて「通じあいでと言文一致も詮があいとは前節の終りで言ふた言葉　それに我に通せない語と何故使ッたら」とも仰ヤいましやうか、が此様な幼あい議論の老成の口から出やう答もなししかしどう御敎へ下さることか　何にせよ「恥しいが知らぬから答へぬ」あどれ御謙遜は是限り　敎を乞ひたくも乞

それあくなりますから　どうか妾の心を心として胸襟を御開きの上　十分よ滿足と覺えさして下さいませ

次よは「どんな粗末な語と用ゐた言文一致でもいけんとハ云へあいと云ふされど演繹してどの文体て曾いでもいけんと云ふことの出來ないで…だが正可そんなことは無いだらう」とですが　如何あ譯で御座んますか　固より文体が變ッてハ言文一致であなくなると存じて居ります　妾の云ッたのは辭のとゝのはぬのが言文一致でいけんと云へぬ　あらは漢文でも和文でも全理でハないのですか　とです　或ハ原因れ障礙ともも仰ヤいましやうか　原因に障礙がおるそ何も言文一致のゑではないこと　普關に存在する事實でしやう　で言文一致でもいけんゑのといゝんと云へるもれぶそ｜間遂ッてゐるりは存じませんが｜心術て居ります　しかし之ハ理論についての話し　妾れ之を現實み施して「見るに見られあん」あどゝれ云ゝぬのです　固より云ひたくもなく又云ひたくも云ふ丈の資搭があいのですもの！　其「だがしかし」ふら「星程もねりますまい」迄ハどうも了解に苦しみました「ー度で分らぬのか」と極ッて誰方からも叱責を褻むる妾、再應の御敎授を只管御願ひ申ます

最後は即ち語典と新字とのこと「御計諧と御開かせ下さいませ」との企望も空しうなりませんでしたれハ　亦有難く存じます　今更改めて申そでもありませんが先回の御論でハ「神聖むしろ奇怪な勢力を持ッた字書」とより外ハ實に思へませんでした　「言語を調べて其言語で文章を書く」とか「いよ〱使はんければならんのそ矢張り之を日本語とする」とかのゝ言葉から推せば「其中に無いのそ使へぬやう」と見たのハ恐らく妾一人ではゝりませんでしたらう　其やうなものハ固より出來やう等もあし又之を諸先躍よも望まなんだのです　が今度のでハ字豊でなく全く語典だとのこと　ゝ學けの語典編纂につんての効用中には　自然ふ背いた制限などもなし　どう不贊成を中し上けましやうの　出來あいとか報償價値が無いとか云ふたのは　今仰ヤるれとい別れ問題についての話　各にそれを彼是言ふのは盾れ金銀を爭ッた狀態を學ふのです　「文學れ進略を杜絶する」と云ッたのが明瞭にゝ分りにならぬとのこと　之も前回のゝ説と妾れゝ説に對した意見とと更にゝ味ひ下さいませ　決して進歩の上より効益を與へるものとと受取れませんでした　それりられ發言です「不自由そ進歩と妨げるとて嫌がるものだが秩序といふものと與へあゝればあるまい」｜秩序を與へるゝ精神から出たのでありまそなれば　何故前回でそ却ッて秩序を破るやうあ形跡のなるゝ

文でありましたことか　不思議なことゝも思はれ無くはありません

語典編纂に付いての効用は御說の如く色々御座いましやう、妾迚俗言俗語に存在する諸格と發揮せられたいと望む意を明らかよしたれは己に御目にも止まッてゐましやうなれ、完然ある其書の大成を見たいもれとは妾等全志のものに限らぬ希望くは其喜びに遇ひたいもれです新字よついては推しての御尋ねがありましたが贊成共不贊成共既得の經驗が決斷の口と開うせません　で何とも得申しませんがヴハヰオリンなぞゝウよ濁音を付々たものも間々見受ける折必要に逼られては程無く世にも出ましやうか何う之よついて御考案があること御座いますれど公開れ程を御願ひ申ます

右御厚情よあまへてのことゝ近づくれば即ち押るとの御叱りなくはれ同志のものと思召し更に御示教を仰ぎます

新年初刷の以良都女　　まゝ子（イセ）

と見て思出せしとなり。今其を記るせて下條のごとく、一、二、三となる。〔第一〕懸賞物を添削されしと、思へど面倒なるよと感心せり。別に此れ相談なるが、無賞の分れ總べて没書よとして甚麼。〔第二〕「三坂孃へ。」として、鹽澤庄吉樣の寄書あり。我義きに以良都女六九号よて、方樣れ「言文一致についての意見。」を見し折、方樣れ去々十一月の日本之少年一八号問答欄にて、「近頃人体と染白する法ありと聞く、果して然らば化學上如何なる作用によるか。右下野七井鹽澤庄吉。」また仝年十二月れ仝誌二〇号仝欄にて、「我邦小說、及び雜誌の起原の沿革の大略を示せ。右下野七井鹽澤庄吉。」などゝ問れし方ならんが、何時の間にか、言文一致好兒と變られしよなと惑ひぬ。今も再び方樣の寄書を見る。さりながら、倘し日本之少年誌上仝名異人あらば、平よ許されよ。さても方樣と、三坂姫との理屈、質軒居士と、樹翠陵史との論を、むづかしやの哂ひたるを今も忘れず。我れ「言文一致が私しの主義。」といふ方樣と、「命かけて言文一致を守りたい。」といふ娘樣とが、味方打として、何とそると哂ふ。〔第三〕文學小言。他人は去來知らず我は大兄に氣に入りぬ。以良都女一冊二錢五厘の値打は皆此處に在り。　我此類は大好きなり。何でもかまはぬ、氣に食はぬ相手はどしくゝとぶつべし。先づ書くとは此で擱く。

此日貴女之友昨年の終刊延着せり。我に一報と済らす。曰く「いらつめは云々。」と以良女都子は見たまひしな

らん。心に心甚麼。（廿四年一月八日。世を憚からぬまゝ子。）

通信問答

なさ子――㈠庖丁杯よ鑄の付かぬやうにすると油を塗る位の物です。但し是も不便です。先此事はよく知りません。㈡懸と愛とも稍意味が違ひます。懸は愛の一部分です。人を見初めてそれを慕ふのは即ち懸ふのです、但しまだ眞正の愛がこゝで成り立ッたのでは無いです。それから互よ親しゝ、互に休戚を同じくして懷かしむ、是が即ち愛するのです。例して見れば此樣な物です。㈢頭髮れフケを去る法は以前のいらつめに在りました。郵劵八錢御送附なら上げます㈣手についたインキは大抵摺でよく洗ふと落ち升。是で落ちなければ修酸で洗ふと宜しいです。

三坂きぬ――㈠教師三味の挿畫の題字「男と紅粉」の下は「蟻とさたしも」です㈡てにと俗解書は幾らも有ま升。中で語彙活語指掌など宜しいです。大坂なら岡嶋などに賣ッて居ましやう㈢小說添削れ草稿は筆の入る餘地さへ有るやうな書方ならば宜しいです㈣韻文れ掛言葉は成るべく仮名を正すが宜しいですが止を得ぬ場合よと仕方ありません。ユフグレを言ッに掛ける杯は一体不法でもが中古來の慣用と最早爲ッたこと故仕方ありません、是等は用ゐても宜しいです。

まゝ子――㈠むら千鳥、むら竹などのムラは村で無く、群の意です。㈡うらはづかし、うら悲しなどのウラは心裏といふ意味です。

山本ふさ――㈠武藏野、蝴蝶、いちご姬などの時代語を學ふにて能の狂言正本など見れば一部分の處は分ります㈡人を吊尋ねて進物を出すのも場合により違ひます。何かの賀儀、事其他儀式れ時の進物は自分が行ッて直に出すべき事です。それで無い手土産は歸る時よ出すが道です㈢今日文學の原稿料れ十行二十字詰一枚五十錢以上一圓五十錢以下（尤も是は今日大家といふ人々れ）です。

丁M生――㈠梅花道人れ其韻文に「アハヽ」などの感投詞を用ゐますが吾々にもまだ之を旨く用ゐ得た、とは言へません。必すしも用ゐるなと言ふ法も有りません。道人のやうに用ゐるのは不穩當な氣がします㈡梅花道人れ本名は中西幹男氏㈢はパラダイスロストの譯書は有りません。

原田爲吉――㈠酒の香めなくなる藥の有るかどうかは知りません。何よりは禁酒は斷じて心から行ふに限る事です㈡ガルハニ渡金は電氣作用で行ふ鍍金です。初歩の物理書に說明してあります㈢言文一致論は美妙齋子も一書にする計書中

であるのです(四)仮名遣を覺えるには物集氏の仮名教科書が宜しいです(五)長音短音の區別と國民の友内の韻文論に書いてあります。更によく御覽下さい(六)福壽草が心臟病に効の有るとの事ハ如何にも諸新聞に云て居ましたが吾々はどうか知りません(七)樂器の中では月琴が早く熟練するものです。但し月琴は音樂の性質が日本樂や西洋樂より遥に劣ります。洋樂の中熟し易いのはオルガンです、其代價も十八圓以上色々有り升

醉香――(一)日本にはまだ日本美術史と言ッて纏まッた物は有りませんこれに近い物は容齋の前賢故實、其他集古十種、工藝志料抔です何れも大部物です(二)人類學ハ俗に釋すれバ人類の發達、根原と攻究する學です(三)審美學ハ詩歌に限らず一切の美術につゐて汎く論究する學です(四)審美學ハ哲學中の哲學とも言ふ程の高尚幽玄な物です。釋本では中江篤助氏の維氏美學抔其一班を知るには足ります。

つらき――(一)日本には純粹の美辭學書韻文學書はまだ有りません。之に似寄の物は、僞鳥羽帝の八雲御抄、定家の明月記題輔の悅目抄、各歌合類、烏丸黄門の耳底記、契冲の各著、其他さびしをりなどの寄の物です。漢書に爲ッても亦同樣です。有る事ハ有ッても似寄の物です。是等及び西洋の御入用なら答へます(二)二年ばかり前高田早苗氏が美辭學といふ物と著はされました(金港堂)文法を説いたのには依田百川氏の新評戲曲十種が有ります。日本文學史には簡素ながら新版の日本文學史(三上文學士著金港堂)抔有ります。

横山ひろ――折角の御問ながら織物の疋絣染と色物染と見分ける法は知りません。

かへづ――(一)今の流行の時計鎖の形は天賞堂でよく諸新聞雜誌に廣告して居る圖のものです(二)日本授産館傳授の有無は知りません(三)學校卒業女學生への祝の贈物には手附ぐをの處織物抔が宜しいでしやう(四)府下で學生にコレラは少いです、腸チフスは何とも言へません(五)徒然草から土佐日記、それから枕の草紙、染花物語、それから源氏と讀むのが入り易い事でせう(六)櫻陰天女圖の意は只櫻下に天女の居る圖との事。

横田――(一)仰の通りコロンとポマドンヌールを用すいらつめ第卅号にあつた心得に從へバ身体白色は得られまい(二)博文館出版の日本文典は惡い本でも無いです(三)東京小新聞の中で中新聞抔は一寸品も有ります、繪入自由は既に廢刊しました

柳子――(一)御示しの書は僞作に比して甚だ美事です。倘も書を修めやうとの御思立は決して惡く無いと思ひます(二)日本に是と言つて肉体書の粉本はまだ有りません(三)美術世界は一冊卅五錢發行處は日本橋區通四丁目の春陽堂です。

志風

花浮氷　　三坂絹子

志賀の浦や花の小波立ちにけり、
うたねの鳥もゆめや匂はむ。

江上冬月　　同　上

風吹けど葦の下折れおとも無し、
水にみだれぬ冬の夜の月。

四季の夜句(今様)　　菊野はな子

夜ごと〱のおぼろ月、
梅が木かげに立よれバ、
それかあらぬか一雫、
雨になりゆく春の空。

夜ごと〱の涼み舟、
川の瀬下しこぎ行けバ、
山の端よりぞてりそめて、
月になりゆく夏の空。

夜ごと〱の蟲えらみ、
匂ふ七草わけ行けバ、
尾花が末に風立たり、
露となりゆく秋の空。

夜ごと〱の窓の内、
文の山路へわけ入れバ、
のこる埋火肌さむく、
雪になりゆく冬の空。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

花織錦の發明者として其名既に貴婦人社會ニ聞えた

川崎花子孃が業餘に成した

實際的新作小說

花おりしき

美妙齋主人が燈前夜話の第二として草した

一種新奇有益な文學上の所見

文學的快樂

右二種ハ次号からいらつめに出ます。

右　成美社

去月二十日のいらつめハ例のインフルエンザに罹り職工に差支を生じ止を得ず一回休刊とし其七十八号と即ち今五日に出しました

右　成美社

神田一女生 右ハ本號掲載無名小說の著者の處御宿所も御姓名も知れぬ色々御面談も望ましいまゝ何卒御自身當社迄御報知を願ひます

右　成美社

下宿屋向

賣家

御望の御方ハ本郷區弓町二丁目三番地大川方へ御來談を乞ふ

美妙齋主人の作で目下定まッて諸方へ出て居るハ**日本評論**ニ**韻文及時代小說笹りんだう●立憲自由新聞**に**小說白玉蘭●國民の友**に**韻文論●改進新聞に色々**

樂器着荷廣告

弊店義兼て**歐米へ注文**致置き候**ピヤノ○ヲルガン○ヴァイヲリン○**並に**歐米諸大家ノ音樂書籍數百種今回着荷**致候に付き**非常廉價**にて販賣可致候間御一覽の上御購求被下度伏て是祈る和製ヲルガン義も近頃諸機械を設置し凡て歐米製と異なるなき品を製するに至れり

貳拾圓以上百貳拾圓迄數種

ピアノ○ヲルガン○御深切ニ調律修繕可致候

東京市神田區通鍋町拾番地

高木商店

但雛形代價附御入用の節ハ御申越次第直に郵送す

明治女學校女子職業部規則

○本部ハ女子に職業を教授する所とす○本部に於て教授する職業ハ裁縫○縫箔○圖繪三科とし各科の卒業を二年とす（但編物ハ各科生共隨意に學バしむ）○本部ハ別に主計科（五ケ月卒業）を置き簿記○筆算○用文○速記術に熟達せしめ書記主計の任に適す可き婦人を養成し新聞社○會社○銀行○商店の傭聘に應することを得しむ○本部普通生の外に兼修生を置き都合に依り二科以上を兼修することを得しむ（殊ニ他の學校生徒及家事を取る人の爲めに便利を謀る）○本部の授業時間を一日七時間とし内二時間を讀書算術及修身上の講話ニ充つ○授業料ハ普通生と一圓とし兼修生と其半額とす○入校を望むものハ年齢學力の定限を置かずと雖も品行方正ニして必ず慥かなる保證人と立て東修金一圓を持參す可し　寄宿と望むものハ本校の熟舍に入れ其監督を受けしむ

明治二十四年一月始業

東京麴町下六番町六番地
明治女學校內

女子職業部

第二期 通信女學 新募集

問　一年の計事は春に在りと云ひ升、此の一年は如何しましやうか。

答　何よりも先づ少し學問を爲さつては如何です。

問　學問は勿論したいのですが、此齢では學校にも參られませず、獨りでは稽古も出來ませぬゆゑ當惑致し升。

答　ナンノ訳あた、夫には至極よい手立があり升。

問　學校にも行かず、教師もなくて、學問が出來升乎。

答　其の手立は唯一の、通信女學を御覽なさるのでそ家の用事を爲ながら、獨りで稽古が出來ます、一年御奮發なさつたら立派な學者にお成なさりますよ。

今年學びずして來年ありと言ふと勿れ、今日學びずして明年ありと言ふと勿れ。過る一年は夢の如し來年いざ勉强せん。人生れて學者なし若し學ばゞ何人も學者となる。萬物の靈たるは智慧あるに由る智慧は學問なき人に宿るとなし。機會は額に毛ありて後ろには無き頭の如し、一と度び前を過ぎしむれば復た捉らへ難し、決心は今日、今日、今日に在。

學問隆盛の今日、女學の進歩一と方ならぬぞ、凡そ年頃の娘君にして奮發學に就かぬは最と〳〵少なく、既に一家の妻となりし方にても晩學の勉强をさ〳〵年少の人に劣らぬも多し、慨して何處の婦女子も皆な學問と云ふとお心掛け凡そ此心掛なきものは當今の女德に欠けしやう思ふに至りぬると明治れ代の恩澤にて有がたきとと云ふべし、因て何處にも女學校の設けあり何處の娘君も玆に入學して日々の進歩相覺しきとあるが、既に妻となり母となりて一家子女の掛念ある方々は最早家を出で通學するとも出來ぬ又家に教師を引て教を受るも甚ハだ手數なれば今日の時世に斯る御婦人のみ此儘無學に終るべきこのと心配する人も少なからず、此類の御婦人は何か家に在りて獨り稽古をする工夫なきか又獨學に便利の書物はなきこのと屢は問合せなり、吾社之を以て遂に意を決し、昨年一月通信女學の仕組を新設し、毎月一冊の講義錄と出版して、四方晩學の婦人居ながら普通の女學を獨り學びするの便に供へたるが、本年一月に至り、一ヶ年の課業を恙なく卒へて、快ちよく全科を卒業したるもの七百餘名なり。然るに、去年

一月申込の期に後れたる人々も少なからざるを以て、本年更に講義錄を再版し、改めて第二回の習讀者を募る。
毎月二百頁以上の講義錄一冊配達、毎日四枚づゝ讀み、一月にて一冊を終へ、一年十二冊讀了て全科を卒業す。
毎號教授の科目、枚數、及教師左の如し、

科目	一年枚數	一月枚數		教師
萬國史	三五〇	二八	明治女學校教諭	木村祐吉
日本歷史	二〇〇	一六	同	鈴木弘恭
算術	五〇	四	同	磯貝由太郎
簿記	一〇〇	八	同	村木經策
理化學	一〇〇	八	明治女學校教諭	吉田伸子
生理學	一〇〇	八	醫學士	三島通良
動植學	一〇〇	八	農學士	寺尾熊三
作文去文例	一五〇	一二		鈴木弘恭
料理	一〇〇	八		ホイトチー孃
歌詠方	五〇	四		鈴木弘恭
女禮	五〇	四		神谷銀一郎
和文讀本	二五〇	二一		鈴木弘恭
漢文讀本	三〇〇	二四	明治女學校教諭	八木秉辰
家政學 衛生、育兒、看病を合す	二〇〇	一六	醫學士	三島通良
裁縫	一〇〇	八		渡邊辰五郎
圖入地理	一五〇	一二		磯貝由太郎
英學	一〇〇	八		山川 子

右諸科目ハ何れも獨學に差支なき樣記るし置くと雖とも尚疑ハしき條ありて質問を寄する者にハ各科の教師より夫々鄭寧に應答すべし。
一年にて右諸科目を終る、此丈けを心得れバ普通一と通りの女學は學び得たるとにて文明なみ〳〵の交際に差支を生せず若し此丈けをだに知らねは今後二三年の内に婦人仲間中以上の交はりにも列し難きことあるべし。
女學雜誌ハ其時々に切要なる女子の心掛を論じ通信女學には永久女子に入用なる學問を教授す其二つ乍ら欠く可らざるは食物と着物の如し、女學雜誌は四季折々の必要を足し通信女學ハ年中同樣の必用を足す、故に二つを合せ御覽にあらバ一層に便利なるべし、編者も亦其心掛にて編輯し相合せて錦と花との如く爲さまく祈る。
通信女學一冊前金三十二錢(無郵稅)、半年分前金壹圓八十錢、一年分前金三圓五十錢、一切前金に非れバ發送せず。
明治二十二年一月廿五日第壹號を發兌し、以後毎月廿五日に出版して翌一ヶ月中の科目となし、其十二月に至りて全科卒業となす。

(遞信省認可)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY